

はじめに

ラファイエット夫人によって書かれた『クレヴの奥方』は、1678年に出版され、フランス文学史上「最初の分析小説、最初の心理小説、最初の近代小説」<sup>1</sup>と考えられている。この古典的小説は、確かに今日に至るまで途切れることなく愛読者を獲得し、映画化もされ、文学研究の対象となっはきたものの、大きなブームとは無縁のものであった。ところが、2006年2月に就任前のサルコジ前大統領が、『クレヴの奥方』が出題された公務員試験について「役所の窓口の人に『クレヴの奥方』をどう思うかなんて聞かろうか」と発言して物議を醸し、一躍名を知られるようになった<sup>2</sup>。2008年には、サルコジ発言への抗議として、『クレヴの奥方』を現代に置き換えた『美しいひと』という映画が作成された。さらに、サルコジ政権発足後、2007年から2009年には文学研究者などが中心となって『クレヴの奥方』を野外で朗読するという反サルコジ運動を展開し、「私は『クレヴの奥方』を読む」というバッジも作られた。反サルコジ派は、大学とは無益な美との出会いの場でこそあるべきではないか、と主張したのである<sup>3</sup>。

果たして『クレヴの奥方』は役立たずの遺物に過ぎないのだろうか。現代の教育論争に担ぎ出されたこの小説は、フランス文学における心理分析小説の原型としてのみならず、人間の普遍的本質を描く小説の原型としての価値を失ってはいない。事実、この小説を祖とするフランスの小説群は、遠く日本文学にも影響を与えた<sup>4</sup>。本稿では、華やかな宮廷人たちの心理の動きが、仮病、病、死、という身体的事象と関連づけられていることに注目する<sup>5</sup>。心理と「病」の関係に焦点を当てて『クレヴの奥方』を読み直すとき、社会と人間、理性と感情、心と身体といった、時代を超えて人間を取り巻くいくつもの相関が浮かび上がってくる。本稿では、解決不可能な価値の対立の狭間で葛藤し、病を得る人間の姿について考えてみたい<sup>6</sup>。

## 1 宮廷社会と結婚

『クレヴの奥方』は「アンリ二世のご在位の時代、特にその最後の時期ほど、フランスに豪華で艶やかな気風が極まった時代はないだろう」(11)という書き出しで始まる。史実によれば、アンリ二世は、1547年から1559年に在位した、13代続いたヴァロワ朝の10代目に当たり、続くブルボン朝の中央集権国家の土台を築いた王である。現在のフランス最高学府「コレージュ・ド・フランス」の起源を創設したのは父王フランソワ一世によってであり、16世紀は近代フランス文化の揺

<sup>1</sup> Mme de Lafayette, *Œuvres Complètes*, Gallimard, 2014; IntroductionXXXII.

<sup>2</sup> “Et Nicolas Sarkozy fit la fortune du roman de Mme de La Fayette,” *Le Monde*, 29/03/2011.

<sup>3</sup> “La Princesse de Clèves défie le président,” *L’Express*, 26/02/2009.

<sup>4</sup> たとえば大岡昇平は、『武蔵野夫人』巻頭で『クレヴの奥方』の流れを引く『ドルジェル伯の舞踏会』に言及し、執筆に当たっては『クレヴの奥方』を読んだとされる。

<sup>5</sup> パーソンズをはじめとする社会医療学の「病人役割論」等、および「詐病」周辺の精神医学上の分類も参考とする。

<sup>6</sup> 『クレヴの奥方』のフランス語原文は前掲書 *Œuvres Complètes* を参照する。引用は2016年刊行の光文社『クレヴの奥方』永田千菜訳を使用し、引用末尾にそのページ数を記す。

籃期である<sup>7</sup>。アンリ二世の時代は、ヨーロッパ各国との戦争や宗教改革による社会の混乱に耐えて、あるいはそれらを糧として、芸術や文学といった「フランス風の教養」(14)が確立していった時代だ。ラファイエット夫人は17世紀半ばのルイ十四世による絶対王制下の宮廷に生きた女性であり、この作品中の宮廷描写にはその経験が加味されているとはいえ、基本的には史実に則りながら、登場人物に小さな改変を加えて作品を構築していった。「毎日のように行なわれ」(11)る狩猟、球技、馬上競技から、舞踏会や饗宴まで、参加することは宮廷人の義務であった。この義務は男性に限ったことではなく、女性も宝飾品で着飾って社交義務の遂行に励まなければならない。「豪華」な宮廷という社会は、王を頂点とし、すべての人間が四六時中、王の顔色をうかがうことを前提として成り立つ窮屈な社会でもある。そして、「宮廷中が二派に割れ」(22)て、戦果と政略結婚を武器に権力闘争を繰り広げていた。このような閉鎖的な競争社会では、社交から離脱することは失脚を意味する。誰が誰の味方であるのかを探り、有力者を「自派の味方につけようと画策」(20)するために、社交生活を続けていく必要があるのだ。

冒頭で「艶やかな気風」と訳されている“*la galanterie*”は幅広い意味を持つ言葉だが<sup>8</sup>、すぐ続いて「ヴァランチノワ公爵夫人へのご寵愛」(11)とあるように、この作品の文脈では、妻に対する愛情ではなく、愛人への激しい恋情のことと考えてよい<sup>9</sup>。この小説が婚姻外の愛人を中心とした展開となることを示唆する冒頭である。王妃であるカトリーヌ・ド・メディシスがヴァランチノワ公爵夫人より後に登場する構成も、愛人への恋情の優位性を表わしている。愛人であるヴァランチノワ公爵夫人の方が「この国の実権を握っていた」(19)のであり、妻である王妃は「感情を押し隠して」(12)平静を装っていた。この三角関係が奇妙な安定性を保っていることに注意したい。もとより、結婚は権力闘争の切り札であり、夫婦という関係性に恋情は含まれていない。王妃は、夫に恋情を求めるのは無い物ねだりであることを十分に理解し、愛人に対して「寛容な態度」を取るという「戦略」(12)で、夫婦関係の破綻を避ける。しかし、その王妃自身、ただ忍耐に甘んじていただけでなく、シャルトル侯という貴人と愛人関係にあった。政略結婚が当然であった宮廷社会において、恋情は婚姻関係外で生じるということもまた当然だったのである。

## 2 ヌムール公とクレヴ夫人

社交術と秘密の恋愛が繰り広げられる宮廷文化において、理想の男性像を体現する人物として登場するのがヌムール公である。誰もが一目で魅了されてしまう「自然の美の最高傑作」(18)であり、複数の愛人がいるのはもちろん、王太子妃にも「特別の好意」(19)をほのめかし、イングランドの新エリザベス女王との縁談まで提案されるほどの男性である。この提案に対して、画策の秘匿を王に約束させるためのヌムール公の口上、この作品に初めて出てくる直接話法である。冒頭から続く地の文による歴史上の複雑な人物相関図の中から、生きた人物としてヌムール公が前景に

<sup>7</sup> 佐藤賢一『ヴァロワ朝—フランス王朝史 2』講談社現代新書、2014年。

<sup>8</sup> 旺文社『ロワイヤル仏和中辞典』では「(女性に対する)親切」「(女性に対する)機嫌取り」「(文語)情事」などの訳語が挙げられている。

<sup>9</sup> “*la galanterie*”については、岩波文庫の生島遼一訳は「優雅の風」と永田訳に類似するが、新潮文庫の青柳瑞穂訳では「色道」となっており、より明確に愛人関係を意識した訳になっている。

出てくる瞬間だ。王を相手に、恋愛に関連する軽い自虐を加えながら、説得に成功する巧みな会話術もまた、ヌムール公の宮廷人としての完璧性を示している。他の宮廷人と異なりヌムール公の家系に関する説明がないのも、史実のヌムール公を恋愛の権化として架空の人物に仕立てるための作者の仕掛けである。ヌムール公は、宮廷風の「艶やかな気風」を象徴する人物として描かれているのである。

一方、「完璧な美」を備え「美しいものなど見慣れているはずの宮廷の人々でさえ、うっとりしてしまうような美しさ」(27)を持つ、後にクレヴ夫人となるシャルトル嬢は、特別の美貌という点ではヌムール公に引けを取らない。王家につながる「シャルトル侯の親戚筋」(27)という「フランス屈指の名門」(29)の家柄で、誇り高い母親は高貴な家柄の相手との縁談を探している。家名を最優先に会ったこともない相手との結婚を画策する宮廷の慣習を踏襲しているという点では、シャルトル嬢は第一に、その守護者の文脈で登場するのである。それならば、政略結婚につきものの婚姻外の恋愛も、暗黙の社会通念として教えられてもよいはずである。ところが、母であるシャルトル夫人の教育は、宮廷の通念とは明らかに異質な「貞淑な女性」(28)の育成を目指すものだった。「よその男と愛の誓いを交わすことで家庭を壊」(28)すことが女性を如何に不幸にするかをとことん教え込んだ。シャルトル夫人の言う「夫だけを愛し、夫から愛される」(28)場合の「愛」とは、恋情とは異なる、持続的で静的な感情だと考えられる。シャルトル夫人が娘に教えこもうとした「徳」(28)とは、家名を重んずる形式的な結婚という枠組みを決して壊さない決意である。このような決意は理性が感情を制御することで成り立つことに注意しておきたい。シャルトル夫人は夫の死後何年も「社交とは距離を置き」(28)宮廷から離れていたからこそ、感情と無縁でいられたと考えられる。宮廷という場において、理性による感情制御が可能であるか、という問題が提起されている。

このような教育を受けて育ったシャルトル嬢と初めて会った叔父のシャルトル侯は、「透き通るような白い肌とブロンドの髪」の「これまで誰も見たことがないような輝き」(29)に驚くが、このような外見は、彼女の宮廷における異質性の象徴と考えて良い。自分に見とれる将来の夫クレヴ公の視線に顔を赤らめ、宮廷での賞賛に「聞こえていないか、一切気にしていないかのよう」(32)な態度を取るシャルトル嬢は、「艶やかな気風」を軽やかに楽しむ文化においては異質な存在である。シャルトル嬢にとって、宮廷へのデビューは二つの相容れない価値観のあいだに容赦なく放り込まれることを意味している。シャルトル嬢は、母の計画通り、従来宮廷の慣習に従ってクレヴ公と結婚する。結婚という形式の安定性を保つための「敬愛と感謝」(47)を夫に抱き、夫以外には決して隙を見せない「近寄りたがたい女性」(52)として母の教え通りに振る舞うクレヴ夫人は、母の教えを忠実に守っていると言ってよい。しかし、クレヴ夫人はヌムール公に会ったとたん恋に落ち、一瞬にして母の教えに違反してしまう。一方、シャルトル嬢に一目惚れしたクレヴ公が、派閥争いから結婚に反対していた父の死により、シャルトル嬢との結婚が現実味を帯びる中で常に感じている「自分に好意を抱いてくれるのだろうかという不安」(45)は、安定性を欠いた激しい恋情である。クレヴ公は妻にも同じ気持ちを求めるが満たされない。結婚当初から妻が「不安になったり、胸が苦しくなったりする」(48)感情を持ってくれないことに不平を漏らす、シャルトル夫人が想定していた夫婦間の愛情の点からすると過剰な感情である。シャルトル夫人にとって夫婦愛は婚姻を持続させる意志的なものだった。この点でクレヴ公もまたシャルトル夫人の価値

観に違反していると言えよう。彼らは、形式と理性の点ではシャルトル夫人の価値観に沿う夫婦であり続けるが、どちらも制御不能な感情によって安定から逸脱することになるのである。

### 3 仮病

シャルトル夫人は「宮廷では表面だけを見て判断すると、間違ふことが多いですよ。見た目は、ほとんどの場合、真実とはほど遠いものです」(60)とクレヴ夫人に語ったが、先に述べたように、宮廷の「表面」は、男女を問わず社交術を駆使して張り巡らされた緊密な人間関係で成り立っており、たとえ喪中であっても長くは「閉じこもってはられない」(106)社会であった。宮廷人たちが連日集まってはおしゃべりや娯楽に興じることは、宮廷社会の中で個人に課せられた義務でもあった。そしてたとえ「秘密として聞き、秘密として話す」(92)場合でもすぐに「一字一句違わず」(93)伝わっていくような、油断のならない情報社会でもある。そのような社会においては、「真実」は容易に明かしてはならないものであり、真実を隠すことは処世術の一つとして確立している。この作品の登場人物たちにとって、仮病は、それ抜きで社交生活が成り立たないほど頻繁に、また容易に使われる。仮病は、社交という義務の不履行に対する社会の非難をかわし、真実を保護する機能を果たす。

では、仮病によって隠された真実とはどのようなものであったのだろうか。たとえば、アンリ二世の家臣は、王が愛人のヴァランチノワ公爵夫人との観劇を急遽取りやめる告知をするとき、「夫人が体調を崩した」(91)ことを口実に使う。しかし周囲の誰もこの口実を信じない。仮病であろうと見抜き、真の理由は夫人との諍いにあるだろうと詮索し合う。まもなく、真実を知る側近によって、隠された真実とは愛人の浮気を疑った王の怒りであることが暴露される。仮病には一時的な効力しかなく、隠された真実はいずれ明るみに出るものなのである。クレヴ公が妻に聞かせるトゥルノン夫人を巡る逸話もこの特徴を示している。急逝したトゥルノン夫人の隠された裏切りに絶望する愛人サンセールは、裏切りの証拠となる手紙を読むため「体の不調を口実に兄を追い払う」(103)。しかし結局、友人であるクレヴ公がサンセールの絶望と怒りをなだめる助けを求めて、サンセールの兄に一部始終を明かす。隠される真実はここでも絶望や怒りといった精神的苦痛の感情であり、これも仮病の特徴である。仮病は一時的に隠すという役割しか担っていないので、精神的苦悩は苦悩のまま取り残されてしまう。

仮病によって一時的に隠蔽された精神的危機が、実際に身体の病として表出することもある。王妃が愛人への手紙の中で「動揺を隠すために病気を口実にいたしました。いえ、でも、本当に病気になってしまいました」(146)と書くように、精神的混乱は真の病気の原因にさえなり得るのだ。仮病は、真の病気の可能性を秘めたものであり、だからこそ隠すという行為の強力な手段になる。さらに王妃は、「体調が回復してからも、しばらくはまだ重病の振りをして」「考えるための時間」(146)を確保し、「体調のせいにしてあなたの前では心の乱れや苦しみをごまかし」(147)、といった風に、仮病という常套手段を駆使して、愛人の裏切りへの復讐を遂げるのである。

仮病はまた、それを観察する側の人間の身体的病の原因となることもある。それは、隠蔽された感情が他者の精神的苦悩を引き起こすからである。たとえば、自分が欠席する舞踏会に恋人に出てほしくないというヌムール公の意に沿うため、ヌムール公のいないサンタンドレ大将の舞踏会に出



たくないクレヴ夫人が仮病を使う場面である（76）。この仮病は、自分に好意を見せるサンタンドレ大將の宴会には行くべきではないという、クレヴ夫人の偽りの理由を不審に思った母シャルトル夫人が、欠席の口実として提案したものだ。シャルトル夫人は、娘の仮病に隠された真実への小さな疑念を発端として、娘のヌムール公への恋に気付くことになり、やがて大きな苦悩に投げ込まれていく。娘への失望感は致命的な身体の病につながっていくが、この経緯は改めて検討する。

仮病によって隠された感情と他者の病との連関という観点からすると、クレヴ夫人を取り巻く重要人物の一連の身体の不調は偶然ではない。母親の死後、ヌムール公への好意だけは「隠し通そう」（117）と決意したクレヴ夫人は、喪中を口実にヌムール公と会わないようにした。喪中と言う口実は、社会生活から断絶して「深い悲しみ」（117）の感情を保護する役割という点では、仮病の代役を果たす。こうしてクレヴ夫人に会えなくなったヌムール公は、「ちょうど体調を崩し」（118）、それを口実に外出を減らす、それは、クレヴ夫人に会えない「絶望」（118）が身体に現れたものと考えられる。「それとほぼ同じ頃、クレヴ公も病に倒れ」（118）るが、こちらも、ヌムール公に会ったことで「乱れがちな心を隠すだけで精一杯」（117）な妻の、自分の話への無関心に対する失望感が潜んでいるのではないだろうか。クレヴ夫人の精神的葛藤が、彼女を愛する2人の男性において病として身体化されたと考えることができよう。虚実の病の連鎖は続く。見舞いのヌムール公は、夫につきそう夫人との時間を長引かせるため、「自身も病み上がりであることを口実」（118）にする。クレヴ公の寝室は、宮廷から隔離された場所でクレヴ夫妻とヌムール公の3人が共有する空間であり、それは仮病にせよ真の病にせよ、病がなければ出現し得ない舞台である。この場面は、ヌムール公への恋を隠そうとするクレヴ夫人の振る舞いに対して、クレヴ公が初めて小さな疑惑を抱き、クレヴ夫人が初めて社交生活との決別を夫に願い出る重要な場面である。そこに真の病と嘘の病、喪中という擬似的病が関わっているのだ。

#### 4 母と夫の病

仮病も、そして、身体の病も、内面的な葛藤と緊密な関係にあることを見てきたが、シャルトル夫人とクレヴ公の重病とそれに続く死は、クレヴ夫人の内的葛藤と密接な関係を持っている。

この小説は、たとえば、王太子妃メアリ・スチュアートにつきまとった従者シャトラールがついには断頭台に送られる史実（41）や、寡婦でありながら2人の男性と結婚の約束をしたトゥルノン夫人の突然の病死（87）や、クレヴ夫人に失恋したギーズの弟君の戦死（143）など、恋愛がらみの死がいくつもちりばめられている。この構成自体が、病気や死は単なる自然現象ではなく、心理との関連があることを示すものだ。心理が身体に及ぼす力は、ヴァランチノワ公爵夫人の父親が、直前に恩赦を受け処刑を免れたのにその場で失神し数日後に死ぬという事件に対して、この逸話を語るシャルトル夫人の「死の恐怖にすっかりやられてしまったのでしょうか」（61）という感想にも示されている。

まずシャルトル夫人の病状とクレヴ夫人の心理との関係を見てみよう。娘が仮病を使って舞踏会に行かなかった本当の理由がヌムール公にあることを知ったシャルトル夫人は、王太子妃とヌムール公の恋愛の噂を娘に聞かせる。それを聞いた娘の顔色が変わったことに気付いた翌朝微熱が出るが、この発病は、クレヴ夫人がヌムール公への恋を初めて自覚した事実と関連する。その午後、

王太子妃自身からヌムール公の好意の相手が王太子妃でないことを確認し安堵した矢先、シャルトル夫人の「容態は先ほどよりもずいぶんと悪くなっていた。熱がさらに上がり、その後数日のうちには重篤な状態になってしまった」(83)。「熱」は17世紀の言説において容易に病を指すとは言え、具体的な症状の記述がなく、病態への無関心さはむしろ「仮病」の記述に近いとも言える<sup>10</sup>。この曖昧な記述の理由は、「熱」の上昇がクレヴ夫人の恋の喜びの増大に伴って起こることに焦点が当てられているからである。クレヴ夫人が恋心と嫉妬心を自覚した時に始まった微熱は、自らの知恵でヌムール公の自分への好意に確信が持てた時に上昇する。病状の悪化はクレヴ夫人の心理的変化との相関関係を持っているのである。病床の母に付き添う中でヌムール公に会うと「嬉しく」(84)もあり、「苦しく」(84)もあり、そんな気持ちにさせるヌムール公が「憎いとさえ」(84)思うという不安定な心理状態こそ、夫クレヴ公が求めていたものであり、クレヴ夫人はついにヌムール公を相手に真の恋愛の段階に入ったのである。それと同時に、シャルトル夫人の病状は悪化し、ついに医者から「臨終に近い」(84)と告知される。娘との最後の会話で、ヌムール公との恋愛沙汰を避けるために社交を断つよう諭し、その2日後に亡くなる。シャルトル夫人の急激な病状悪化と死についても、臨終を告げる医者の登場以外の詳細が省かれているが故に、ますますクレヴ夫人の心理状態との因果関係が強調される。クレヴ夫人の恋愛感情とその自覚の高揚は、シャルトル夫人にとっては教育の失敗への絶望と娘への失望を増大させることであり、娘が「崖の淵に立っている」ことがそのまま、身体的な死の淵に立たせることになるのである。このように、クレヴ夫人の心理状態とシャルトル夫人の病状変化が並列されることで、それらの連関が暗示されている。

次にクレヴ公の発病から死に至る経過をクレヴ夫人の心理との関連で分析する。母親の遺言を守るためヌムール公への恋情を断ち切ろうとするものの結局「感情を抑えることができない」(116)クレヴ夫人は、葛藤の末、相手の名を伏せたまま秘めた恋情を夫に告白することで、夫への貞節を誓う。妻の恋を知ってからのクレヴ公は「生きた心地もしない」(222)が、相手が誰かを突き止めたいという強い衝動から、うまく期を捉えて相手がヌムール公であることを突き止める。告白が別人の話として噂話に上ったことを知ったクレヴ公は、妻から他言を疑われ「精根尽き果て」「意地すらもなくなってしまう」(222)。ちょうどこの頃事故により急逝したアンリ二世の葬儀と新王の戴冠式で宮廷が慌ただしい中、病を口実に社交を避けるクレヴ夫人をヌムール公が訪ねたことを知り、「これまでとは比べものにならないほど激しい嫉妬心」(243)に駆られ、もう二度と「心の平安も理性」(247)も取り戻せそうにないこと、「この世でいちばん不幸な男」(247)であることを妻に訴える。クレヴ夫人が別荘に蟄居すると、ヌムール公が訪ねるはずと踏んだクレヴ公は従者にヌムール公の跡をつけさせる。戻った従者の沈んだ表情を見ただけで「クレヴ公は悲しみのあまり、しばらく動けなかった」(264)。「恋する人に裏切られた苦痛と、妻に浮気された屈辱を同時に味わい、悲嘆に暮れている」(265)クレヴ公だが、密通の事実はなく、クレヴ公の早合点による誤解である。しかし、別荘において、クレヴ夫人がヌムール公ゆかりの品々に陶醉し、その姿をヌムール公が物陰から見とれている光景は、クレヴ公の絶望に十分値するも

<sup>10</sup> Bernadette Höfer, *Psychosomatic Disorders in Seventeenth-Century French Literature*, Routledge, London 2016; p.140 では「省略された病」elliptic illness と呼んでいる。同時代人であるモリエールの『病は気から』等の戯曲における病状の記述に比べるとその簡素さは際立っている。

のである。クレヴ公の「激しい絶望」(265)は、クレヴ夫人の幸福感の純度に呼応しているという点で、必然性がある<sup>11</sup>。

そしてその晩「熱が出る」(265)のである。「熱」の原因は「心痛に耐えることができなかった」(265)からであると、感情と発病との因果関係が明確に記述される。死にゆくクレヴ公自身も自分の死が「あなたのせいで」(267)あると妻を責め、その数日後に亡くなる。シャルトル夫人の場合と同様、病態や治療に関心が払われておらず、発熱から死までの概略のみが書かれ、ここでも医者は臨終を宣告するだけである。異なるのは、シャルトル夫人の場合には暗示されるにとどまっていた死の原因が、ここで明確に言及されていることだ。致命的な病気の原因は精神的な苦悩であり、その苦悩を生んだのが、クレヴ夫人の恋である、と連鎖的な因果関係がクレヴ公の死によって顕在化する。根本原因が病者の苦悩に、さらにその原因が他者の心にある、それが解決不可能であるために、結果としてクレヴ公、そしてシャルトル夫人も死に至ったのだ。このような病と死のあり方は、理性によって感情と身体の制御が可能だとする、デカルト的な合理主義と対立するものだ<sup>12</sup>。理性ではなく感情こそが身体の変化に大きく関与する。しかも、この小説では、苦悩の大きさは死という重大な結末まで招くのである。

## 5 クレヴ夫人の病

以上見てきた図式で言えば、クレヴ夫人自身の内面的葛藤も病として現れるはずだ。夫の死を嘆きつつも、ヌムール公への愛情はなお「情熱的なもの」(279)であり、「理性」(280)によってどう抗おうと、「心はヌムール公に恋をしたまま」(281)だというクレヴ夫人は、「理性」と「心」の間で常に揺れ動いている。母と夫の死によって、「理性」が「心」を否定する力は確かに強化された。しかしそれでもなお、「心」は「理性」によって封じることが決してできないのである。クレヴ夫人の「理性」は、ヌムール公との再婚を恐れた夫の遺言を守ることを要請するが、彼女が何より恐れているのは、ヌムール公の心変わりによる嫉妬で苦しむことであり、これは「心」が要請することだ。「心」の要請が先にあり、「理性」が手段を準備する。ヌムール公を避けて遠方のピレネーへの長旅を決意するのは、嫉妬の苦悩を避けるためなのである。嫉妬の持つ破壊力を夫によって思い知らされたクレヴ夫人が、母の遺言通り「努力と精神力で」(85)嫉妬の悲劇を避ける選択をするのは、「理性」と「心」の狭間で生きるしかない、それだけで悲劇性をはらむ人間による、自分を守るためのせめてもの知恵かもしれない。

しかし、シャルトル夫人及びクレヴ公の発病と同様に、ピレネーに着くなりクレヴ夫人がかかった「重い病気」は「心労がたたった」(303)ことが原因とほのめかされており、この作品において「理性」と「心」の葛藤が身体の病として現れる因果律は確実となる。瀕死状態を経てヌムール公への未練を「克服」(304)したクレヴ夫人だが、なお、ヌムール公の「心変わり」(302)に対する不安

<sup>11</sup> 17世紀の Valincour は、従者の無能さを認めながら、クレヴ公の死の準備としての必然性も指摘している。

<sup>12</sup> Höfer は前掲書 p.149 で「ラファイエット夫人はデカルトの言う理性を直接批判するのではないが、精神による解決が情念の修正をもたらさうという合理主義的な主張に風穴を開けている」と指摘している。

と、「嫉妬の苦しみ」(302)に直面して「心」が「揺らいでしまう危険」(305)を恐れている。「心」が「達観」(305)によってさえ制御できないことを自覚し、徹底して危険を回避するために、社交生活から完全に引退する。クレーヴ夫人は晩年を「信仰に身を捧げ」(307)たが、それでもなお修道院と自邸を往復する二重生活は、「理性」と「心」の二重性を暗示すると考えられる。理性的選択によって実現された「稀に見る貞女の鑑」(307)と讃えられた生涯の中で、「心」の葛藤が消えたのかどうかは描かれていない。それを知る手がかりの一つとして、結末で示唆される彼女の短命に注目したい。クレーヴ夫人がなお、二重生活が暗示する葛藤に苦悩し続けたことが、死を早める契機となったと解釈することもできるのではないだろうか。人間はどんなに理性を駆使しても感情を支配することはできないし、感情は病と死との関連性を持ち続けるのである。

おわりに

『クレーヴの奥方』では、主人公クレーヴ夫人を通して、社会的通念とは異質の価値観を持つ人間に起こる心理的葛藤が描かれている。全編を通して頻繁に登場する仮病は、張り巡らされた他者の視線と情報網から、個人の真実を隠蔽する装置であった。仮病によって隠される真実とは怒りや困惑といった感情に属する不調だが、隠蔽という理知的操作によって解消されるわけではない。ついには身体の病に変質し、発熱という身体の病が内的葛藤の結果として起こる。病状は精神的な苦悩の深まりに呼応して悪化していく。身体は、感情を映す鏡として機能しており、心理の繊細な動きに合わせて、身体の変調が起こる<sup>13</sup>。理性によって感情を制御しようと懸命に努力しても、感情の傷は癒すことができずに、重病と死という結末に至る。

理性より感情に人間の本质を見るという考え方は、パスカルの思想に近いと指摘されることもある<sup>14</sup>。美男美女によって展開される華やかな宮廷生活を期待させる冒頭から、主人公の短い人生の終わりまで、揺れ動く心の動きが病と共に描かれ、感情の前に無力な人間の悲惨さが影を落とす。クレーヴ夫人の、修道院と自邸の往復という半端さが示すのは、彼女もまた生涯理性と感情の葛藤を持ち続けたであろうということだ。主人公たちは、理性によって自分を律しようとするも、完全に理性的であることはできない。感情に翻弄され葛藤に悩む姿の表象が、病であった。小説の舞台である宮廷社会は、規範的、監視的、情報過多、といった点で、現代社会との類似性も感じさせる。この作品で描かれた理性と感情の関係、病と心理との関係といった、矛盾をはらんだ人間の複雑性に触れることは、現代を生きる我々にとって無益ではないはずだ。役所の窓口で、『クレーヴの奥方』の感想を語り合う光景がフランスから消えないことを心から願う。

<sup>13</sup> 感情と身体の密接な関係については、たとえばダマジオのような現代の脳科学者の研究がある。

<sup>14</sup> Francis Mathieu, “Mme de Lafayette et la Condition humaine: une lecture pascalienne de *La Princesse de Clèves*”, *Cahiers du XVII<sup>e</sup> siècle*, Vol XII, n°1, 2008.ここでは「心の平安」(repos)の観点からパスカルとの類似性が指摘されている。